

里の語りべ



小野川の逸話 第1話

橋がなくても 渡れた小野川

語り：越川 悦子さん(佐原イ)



▲大正7年、小野川河口の雑踏の様子

小野川沿いで舟運業を営む家に育った母は、「この川は橋がなくとも向こう岸に渡れたんだよ」とよく言ってたわ。当時、停泊している舟から舟へ乗り移って渡れるほど川がにぎわっていたから出た言葉だったのよ。徳川家康公の政策で利根川が佐原を通り銚子に流れるようになると、小野川が合流し、江戸への道が開けたことで佐原は河港の商業都市として目覚ましい発展を遂げたの。

江戸へ米、酒、醤油、菜種油などを運び、帰りの舟には流行の着物や日用雑貨を積んだそうよ。それらを商店に並べ、家屋も江戸の町屋風に建てていたので、「お江戸見たけりゃ佐原へござれ佐原本町江戸優り」と里歌を歌いながら、買い物に商売にと人が大勢来ていた。その様子を安政5年に医師で文化人の赤松宗巨が本に書いていて、一節が忠敬橋の袂に掲示されているの。「佐原は下利根付第1の繁盛の地なり…(略)…米穀諸荷物の揚げ下げ旅人の船、川口より此処まで先を争い、兩岸の狭きを恨み、誠に水陸往来の群衆昼夜止む時なし」と描写しているね。それくらい小野川は舟であふれ、ぶつかり合うこともしばしば、手漕ぎながら軽い交通事故が水の上で起こっていたというわけ。

小野川が活気に満ちて、大きなお金が動いていたのが分かるかしら？ 経済の中心地といっても過言じゃない、それを裏付ける興味深い話をしましょうか。

▶次号へ続く

香取文芸

応募方法 はがき1枚に俳句2句・短歌2首のどちらかと、本名、住所、電話番号を記入し、〒287-8501 広報かとり「俳句または「短歌」の係まで。毎月20日までの到着分(12月は15日締切)を審査し、翌々月号に掲載。掲載される作品は、選者により評を踏まえて添削される場合があります。

俳壇

谷本 元子選

きちかうや先づ白花の開きたり

高木 瑞恵(野田)

評 「きちかう」は、桔梗のこと。今日は白が咲き、そろそろ紫の桔梗も開きそうなのか…。説明をせずに、「白」から「紫」を連想させる美しい一句となった。雨の桔梗も風情がある。

台風の子報ほどでもなく過ぎし

関 いさお(三島)

うたた寝の女房にそつと蚊遣りぶた

相原 清次郎(大倉)

新米を先づ頬張つて吾れ百姓

宮崎 弘(白井)

送り火や孫車窓よりまたくるよ

黒田 昭二(佐原イ)

歌壇

篠塚 礼子選

風の道えらび休まむ吊りしのお葉うらを見せて吹かれぬる下

菅谷 ふさ(久保)

評 炎天下を歩いて来たのでしょうか、それとも農作業でしょうか。風の通る道筋を確かめて木陰に寄る、ほっとした気分、吊りしのお葉の涼しげに揺れる情景が鮮やかに詠まれている作品です。

初めてのプラネタリウム孫と来て銀河鉄道の旅へと出づる

高橋 良枝(久保)

昨夜の雨に副木もろとも倒されてひまわり優しく横むきに咲く

八角 厚子(鳥羽)

通院の途中の稲は黄金色盆を待たずに刈り入れが来る

森川 哲男(木内)

身を振り鳥野豌豆種子弾く莢黒きゆえに鳥と言うか

並木 伸幸(大根)